B 158　女子短大生の服装に関する規範意識と独自性欲求との関連性

鳴門教育大　○藤原　康晴　　相愛女短大　藤田　公子
夙川学院短大　山本　昌子　　大阪女学園短大　増田　依子

目的　服装についてはさまざまな社会規範があってその秩序が維持されている。しかし明文化されているものはほとんどなく、多くは内在的なものであり最近の社会における個性化傾向が強まるとともに服装の社会規範にも徐々に変容の兆しが見られる。ここでは、女子学生の認知する社会一般の服装期待（社会的評価）と女子学生自身の服装に対する態度（個人的評価）の違いを測定するとともに、独自性欲求との関連性を検討した。

方法　服装についての社会規範は、年齢、性、場面、職場、和服、慎み、学校の制服に関するそれぞれ 2～5 項目から構成される尺度を用い、女子短大生 206 名を対象として社会的評価、個人的評価を測定した。また、独自性欲求は岡本が Snyder の尺度を翻訳した 32 項目のうち、内的一貫性の高い 28 項目を用いて測定した。

結果　規範の種類によって異なるが、概して社会的評価はかなり厳しく、「かなり大切」、「どちらかといえば大切と考えられている」と評定し、個人的評価は、「どちらかといえば大切」から「どちらかといえば大切でない」と評定している。規範の各項目の社会的評価と個人的評価の差のスコア（D得点）を全項目にわたって加算した値と、独自性欲求尺度を構成する各項目への評定値を加算した値との相関係数は 0.262** となり独自性欲求の大きい者ほど社会規範とは多少異なった服装意識をもっていることがわかった。さらに、独自性欲求得点によって被験者を3分割し、年齢や性などの規範の種類別にD得点を算出して比較（分散分析）したところ、性、職場、和服、学校の制服、慎みに関する規範については、独自性欲求得点の大きいグループのD得点が有意に大きいことがわかった。